

『図説 判決原本の遺産』

What the Civil Judgement Files Tell Us

林屋礼二, 石井紫郎, 青山善充 編 信山社 1760 円 (税込)

弁護士のお宝本! tips for a lawyer's talk

会員 光前 幸一 (29 期)



弁護士の雑談力が話題となる昨今です。「雑談力で弁護士が?!」と湯島世代の弁護士は思うわけですが、この本は、真面目に勉強し続けている弁護士だけでなく、かつては勉強したことがある弁護士でも、おのがものとした法知識の引き出しを増やし、弁護士としての素養までが身につくと思えるような本です。

永久保存とされてきた民事判決原本を、最高裁が50年経過後はすべて廃棄するシステムに変更しようとした1992(平成4)年、司法史、文明史を抹殺する蛮行であるとして、国立大学の民法、民訴、法制史の先生方がその保存運動に憤然と立ち上がりました。その結果、今では、50年経過した民事判決の原本は国立公文書館に移管して保管されるようになり、一部はデータベース化もされ、私たちはその恩恵に浴しているわけです。

本書は、このアクティブな先生方の額に汗した奮闘の記録であるとともに、保存された明治、大正、昭和の貴重な判決原本の実物の数々が逸話とともにカラー写真で紹介され、判決様式の時代的変遷や、差添人から代書人、代言人から代理人へと更新されていった弁護士の肩書の意味もつぶさに味わうことができる司法の安価な稀観本です。

本書中に出てくる「信玄公旗掛松事件」、「大阪アルカリ事件」、「徳島小学校遊動円棒事件」といったタイトルは、私たちを初心に連れ戻す特別な響きをもつものですが、意外にその知識はあやふやではないでしょうか? そんなとき、判決原本の文字や文体や解説や写真にひたると、紛争の時代的な背景や地域の慣習が

ビジュアルに理解され、「こんな円棒が国家賠償の解釈に変更を・・・」、「この五葉松(?)の大木が権利濫用の生みの親・・・」といった感懐とともに、事件や法解釈への一途な感興が沸き起こり、もっと早く知りたかったと悔やむような背景事実に行き当たります。また、玉乃世履さんや児島惟謙さんといった著名な大審院長が権大判事、少判事などとして関与された判決の原本や、三池鉦山払い下げ事件(高価な払い下げ後の自然災害で鉦山の価値が滅失したことを理由とする代金減額請求事件—危険負担制度に影響を与えたとされる)で江木衷、岸本辰雄、菊池武夫、高橋捨六、原嘉道といった錚々たる弁護士が代理人として対峙された判決の毛筆原本等を見ると、司法へのロマンさえ感じます。そんなこんな往時の著名な紛争のトリビアを何気なく話せる先輩が数多くいれば、右肩下がりの法曹人気も回復するのではとthinkないでもありません。

判決原本以外の民事裁判資料であっても、歴史資料などとして価値の高いものは、永久保存する取り扱いとなっています。しかし、裁判所は保管の煩瑣から、そのほとんどを例外なく廃棄し、特別保存されているのは東京地裁では11件にすぎないことが、一昨年、報道されました。そのため、各弁護士会は重要な民事裁判記録の特別保存の推進に動き出しています(先月号のLIBRAも取り上げている)。本書は、民事裁判記録というものが、庶民の側から見た歴史の見直し的一端をなしていることへの気づきも与えてくれ、自分たちの仕事の価値を再認識させるものでもあり、老若を問わず、お薦めしたい一冊です。